

那珂川町の文化財 XVI

れ い め い

那珂川黎明

～安徳台遺跡群出土品展～

安徳台

2006

那珂川町教育委員会

はじめに

太古から福岡平野は、肥沃な土地と、北側には博多湾という良好な入江に恵まれていました。また、韓国や中国にも近いという地理的好条件から、私たちの祖先は日本でいち早く先進的な文化や技術を取り入れ、暮らしの向上に努めてきました。例えば私たちの食生活に欠かせない主食の「米」、この栽培方法を学び、現在の食の土台を築き上げたのも私たちの先祖でした。

これから紹介する「安徳台」は、今から10万年ほど前に流れ出た阿蘇Ⅳ期の火砕流が堆積し、その後、数万年におよぶ那珂川の下刻作用により形成されたものです。場所は、福岡平野の最も奥に位置し、空から観察すると、ちょうど平野と山間部の境を仕切るようにして立地しています。

台地は平野との差が30mほどあり、周囲は切り立ち自然の要害ともいえるべき形をしています。現在、木竹が周囲をおおい眺望は効きませんが、それらを取り除けば、平野はもとより博多湾を一望することができます。きっと、当時の人たちは、この台地から自分たちのクニやはるか海の彼方を眺め、さまざまな思いをめぐらせていたことでしょう。



▲空から見た安徳台

写真のほぼ中央に位置するのが安徳台。東西両方向は山地に挟まれ、その間に本町のシンボルである那珂川と古代用水路である裂田溝さくたのうなでが流れる。上方(北側)は開発が進み宅地化した福岡平野。下方(南側)は安徳台を中心に安徳大塚古墳や岩門城と共に歴史的景観をかもした山田の盆地。

安徳台

安徳台は、遠方から見ると小高い山のように見えますが、台地に上がるとテーブルのように平坦な形をしています。台地上の広さは約10万m²で、裾野まで加えると約22万5千m²もあります。台地には、「日本書紀」に記載がある^{さくたのうなで}裂田溝や安徳天皇にまつわる説話が^{いわとじょう}残り、台地全体からは多くの土器や石器が採集されています。また、付近には、^{かくにんちょうさ}岩門城や安徳大塚古墳など学術上名高い多くの遺跡が存在することから、この台地には重要な遺跡が眠っているといわれていました。そこで、教育委員会では、安徳台の史実を調べるために地元の方々の協力を得ながら、平成9年度から7年間をかけ確認調査を行いました。その結果、重要な遺跡が多く見つかり、いくつかは新聞やテレビでも大きく報道されました。それでは、その確認調査の成果を皆さんに紹介します。

安徳台に眠る遺跡

弥生時代の遺跡

弥生時代の遺跡は、住居とお墓が見つかっています。

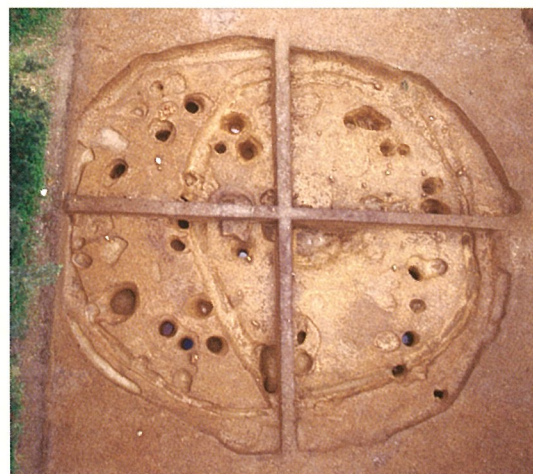
《住居》

住居は弥生時代の中期の初めから後期の初め（約2,200年～2,000年前）のもので、全部で130軒以上が見つかっています。中期の初め頃は台地の南西部、中頃は北東部、終り頃から後期の初めにかけては北西部に多く発見され、時期ごとに住む範囲を決めていたようです。どの時期も周辺の地域と比べ大きな住居が多く、中期中頃では日本でも最大級の住居が見つかっています。



◀2号住居

中期中頃（約2,200年～2,100年前）の円形の住居。直径が14mを超え、この時期の住居としては日本最大級。住居からは^{まがたま}勾玉や^{せいどう}青銅器の^き鑄型、^い鉄器や^{せつけん}鉄片、^{いしほうちよう}石剣や石包丁の未製品、また、それらの加工や仕上げに使用されたと考えられる^{といし}砥石や作業台が出土した。



18号住居▶

中期終り頃（約2,100年前）の円形の住居。直径が約10mあり、この時期の住居としては大型。床は二段に掘られ、それぞれ周囲に水よけや壁を保護する板を貼るための^{へきこう}壁溝がめぐっている。住居からは、^{せい}青銅製や磨製の^ま矢じり、^{てつかま}鉄鎌や鉄片、砥石や韓式土器が出土した。

住居跡からの出土品



◀ ^{まがたま} 勾玉 (2号住居跡出土)
^{かつせき} 上質な滑石で作られている。一度壊れたものに穴をあけ直し使用している。
 (長さ約2.3cm)



◀ ^{こだま} 小玉 (18号住居跡出土)
 韓国でしか産出しないアマゾナイト(天河石)で作られている。この時期の出土例は無く、鮮やかな青さが美しい。(長さ約8mm)



◀ ^{どうそく} 銅鏃 (18号住居跡出土)
 青銅製で中国から輸入されたもの。出土例はきわめて少なく、住居からの出土は日本初。(残存長約2.3cm)



▲ ^{い が た} 青銅器の鋳型 (2号住居跡出土)
^{かつせきせい} 滑石製。ヤリガンナという工具の鋳型。住居に伴って出土した鋳型としては、日本最古級。



▲ ^{せつけん} 石剣 (左19号住居、右13号土壙出土)
^{どこう} 折れているが、石製の剣で、左は玄武岩、右は輝緑凝灰岩を丁寧に磨いて作られている。
 (長さ左約11cm)

《お墓》

弥生時代のお墓は、^{かめかんぼ} 甕棺墓が発見されています。時期は中期の終り頃(約2,100年前)で、10基を発見し、そのうち8基を調査しました。お墓の全体像はまだ分かっていませんが、調査を行った^{かめかん} 甕棺は限られた範囲に、集中して埋められていました。安徳台の甕棺の特徴として、第一に甕の大きさがあげられます。これまで、那珂川町では300基を超える甕棺を調査していますが、高さが1mを超える甕はほとんど無いのに、安徳台では6基が1mを超えています。第二に墓こうの大きさです。墓こうとは、^{まいそう} 甕棺を埋葬するために掘られた穴で、2基は通常の3倍ほどの大きさがあります。また、地表からの深さも2m以上で、ほかとは比べ物になりません。第三に小児棺です。小児棺とは子どもを埋葬するための甕棺です。ほかの遺跡では半分以上の割合で小児棺が確認されていますが、安徳台では1基も見つかっていません。第四に甕棺に納められた^{ふくそうひん} 副葬品です。安徳台からは2基の甕棺から副葬品が見つかっています。内容は、貝輪43個以上、ガラス製の勾玉3個、管玉334個、^{さいかんじょうせいひん} 塞杆状製品4個、^{てつ か} 鉄戈1本、^{てつけん} 鉄剣1本で、1基の甕棺から出土した貝輪の数は日本一です。第五に朱です。朱はとても貴重な顔料で、まれに被葬者の顔

の一部に塗られていることがあります。安徳台ではほとんどの甕棺に朱が認められ、そのなかでも2・5号棺には内側全面に鮮やかな朱が塗られていました。



▲左:5号甕棺、右:2号甕棺 (2号は朱のほかには黒色を、5号は鮮やかな朱を塗っている。)

副 葬 品



▲貝輪(腕輪)
かいわ

ゴホウラ貝という沖縄など南西諸島の海でしかとれない巻き貝で作られている。
43個以上も出土したのは日本で初めて。(長さ13～15cm)



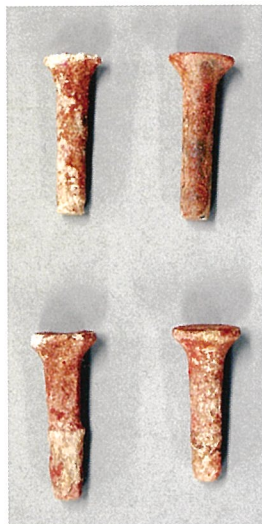
▲副葬品の出土状態(2号甕棺)

腕にたくさんの貝輪をつけている。



まがたま くだたま
◀ 勾玉(左)と管玉(右)

ガラス製で、勾玉と管玉を組合せ、首飾りなどにした。



さいかんしょうせいひん
◀ 塞杆状製品

全国で2例目の出土。中国での使用法と違い髪飾りとして使われたと思われる。(長さ約4cm)

てつか てっけん
鉄戈(右)と鉄剣(左) ▶

生前の権威や地位をあらわすものと考えられている。鉄剣の柄には糸が巻かれている。(長さ約30cm)

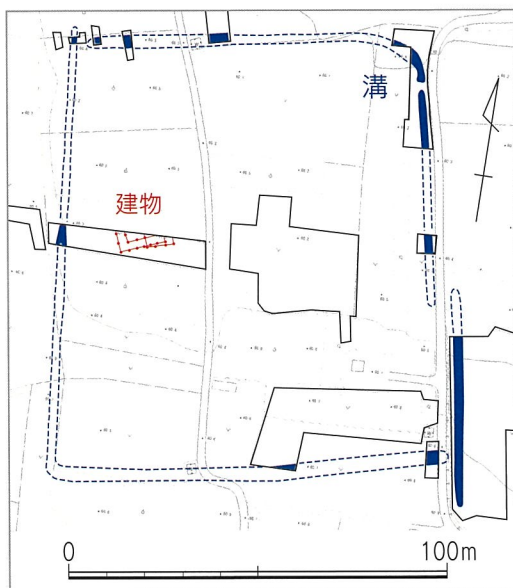


あすかしだい 飛鳥時代の遺跡

飛鳥時代の遺跡は、平野を一望できる台地の北側で見つかっています。柱を建てる掘り方は一辺が1mを超える方形をしています。同様な大きさのものは、大宰府などの一部でしか知られていません。遺物は瓦が出土していますが、この当時、瓦を持つ建物は非常に珍しく、有力な寺院ぐらいいしか知られていません。

1号掘立柱建物 ▶

2×4間の総柱の建物で、倉庫と考えられる。



室町時代の遺跡

室町時代の遺跡は、居館きょかんとお墓しゆこが見つかっています。居館は台地の南西部に造られ、周囲を四角く溝で囲んでおり、内側では建物も見つかっています。このような大きな居館は当時の守護クラスの建物で、当時の那珂川町だけでなく福岡平野の歴史を解明するうえで重要な遺跡です。このほか、居館の東側には墓地も見つかっており、当時の生活空間を知るうえでも貴重な発見となりました。

◀ 居館想定図

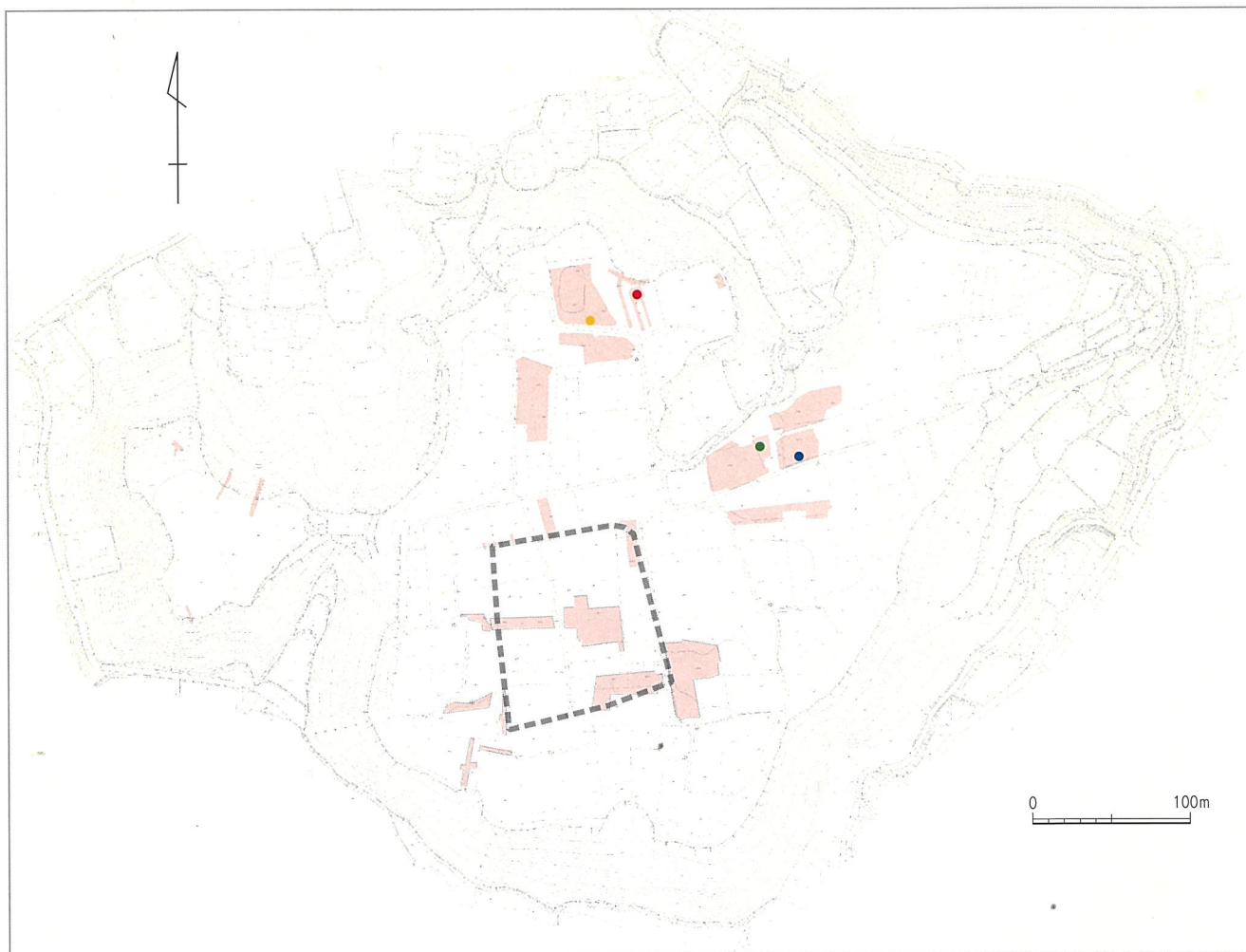
おわりに

これまで調査の様子を紹介してきましたが、調査を行なった面積は台地の2割にも達しておらず、場所も西半部に集中しているため、安徳台で繰り広げられたさまざまな物語や歴史の様子を、すべて解明できたわけではありません。

しかし、これまで紹介したように、さまざまな遺跡や遺物が発見されており、那珂川町だけでなく日本規模で比べても、重要な遺跡であることは間違いありません。弥生時代の住居だけでも、130軒以上も確認していますが、これまで那珂川町で行われた70箇所を超える発掘調査で、同じ時代の住居は13軒しか見つかりません。また、ほかの遺跡と比べ大きな住居も多く、当時の中国や韓国で作られた青銅製の矢じりや鉄製品、玉や土器が出土していることから、ここで暮らした人たちが大海を渡り、はるか遠くの人たちと交流を行っていたことも分かりました。周辺で100軒以上の住居跡が見つかりしている遺跡は、春日市の須玖岡本遺跡や福岡市の比恵遺跡群ぐらいで、いずれも「奴国」の中心や拠点集落であるという位置付けから、国の史跡として指定を受けています。甕棺墓でいうと、中期の終り頃の8基のみの調査であるため詳しいことは分かりませんが、これまで那珂川町で発掘調査された300基以上の甕棺墓と比べると、棺を納めるための墓こうが比べ物にならないほど大きく、さらに2・5号棺のように真っ赤に朱が塗られ、豊富な副葬品が出土した甕棺墓はまだ見つかりません。住居の大きさもさることながら、副葬品を持つことができるのは特別な地位の人に限られていることから、被葬者がこの一帯を治めていた人物であり、安徳台自体が「奴国」の中でも重要な位置をしめる拠点集落であったことは間違いありません。最後になりますが、安徳台は裾野まで含めまったく開発が行なわれておらず、重要な遺跡と自然の宝庫です。この宝をどう生かし守っていくかが、今後の大きな課題です。

▼安徳台遺跡群と同じ時期の主な遺跡





▲安徳台地形図

- 確認調査をした範囲
- 2・5号甕棺墓(有力首長墓)
- 2号住居
- 18号住居
- 1号掘立柱建物
- 居館跡

※いずれも確認調査終了後、埋め戻しをしていますので、現地を見ることはできません。

▼上空から見た安徳台



那珂川町の文化財 XVI
那 珂 川 黎 明
 ～安徳台遺跡群出土品展～
 2006 年

発行：那珂川町教育委員会
 福岡県筑紫郡那珂川町西隈64番地1

印刷：アオヤギ株式会社
 福岡市中央区渡辺通2丁目9-31